

別海町の歴史（簡易版）

別海町郷土資料館

●古代

別海町に人の痕跡が見られるのは、今から2万年前の旧石器時代です。氷河期と呼ばれる寒い時代で、マンモスゾウなどの動物が、北から北海道へ移動してきました。この動物を追ってきた人たちが、別海町（北海道）に住み始めたと思われます。また、野付半島沖では3個のマンモスゾウの臼歯化石が発見され、4万3千～2万年前に生息していたマンモスゾウであることがわかっています。

縄文時代（1万2千～2千年前）になると海岸や湖、川の近くに集落を作り、狩猟・採集の生活をおくっていました。町内の遺跡で行われた発掘調査によりこの時代の竪穴住居跡や土器・石器が見つかります。なかでも西春別2遺跡では、3千年前の縄文人骨が2体見つかります。

その後の続縄文時代（2千～1千4百年前）、オホーツク文化期（1千5百～1千2百年前）、擦文文化期（1千4百～8百年前）の遺跡・遺物が町内から見つかっていることから、この地で生活していた人たちの足跡を時代ごとに追うことが出来るようです。



マンモスゾウ臼歯化石（別海町郷土資料館蔵）



縄文人骨（別海町郷土資料館蔵）

●中世（アイヌ文化期）

擦文文化期の後は、中世-アイヌ文化期（8百～4百年前）と呼ばれ、アイヌの人たちが暮らしていました。竪穴住居から平地住居、土器から鉄鍋の使用など、狩猟・採集、周辺地域での交易などを行いながら、自然と共存する生活をおくっていたようです。また、道南の一部に和人（本州から渡ってきた人）が住み始め、アイヌとの争いが起きるようになりますが、別海町など道東地域の様子はよくわかりません。

この時代に造られたものに「チャシ」があります。チャシ(chasi)は、アイヌ語で「砦・館・柵・柵囲い」チャシコツ(chasi-kot)はチャシ跡と解釈され、北海道全域に分布し、竪穴と共に地表面から明確にわかる遺構ですが、その成立や性格については、必ずしも明らかになっていません。

別海町には、8ヶ所のチャシ跡が確認されています。なかでも床丹1チャシ跡は、平成26年（2014）に発掘調査され、6百～5百年前に使われていたチャシだということがわかりました。



床丹1チャシ跡

●近世（アイヌ文化期）

慶長9年（1604）松前藩が成立し、蝦夷地（北海道）を支配することになります。時代区分としては、近世-アイヌ文化期（4百～百年前）とされています。松前藩は、家臣にアイヌと交易する権利を与えていました。その後は、商人から運上金をとり蝦夷地の場所を請け負わず制度に変わり、交易相手だったアイヌは、商人の漁

場拡

大などに伴い労働力となっていきました。

17世紀の初めころの記録に「メナシ(東の方)のアイヌが、干鮭・鯨・ラッコの皮などを持って松前まで交易に来た」という記録があります。この中に別海地方のアイヌも含まれているかもしれません。

安永3年(1774)東部奥蝦夷地を最初に請け負ったのは、飛騨屋九兵衛でした。野付、別海(西別川河口)に漁場を開き、西別川産秋鮭が江戸に送られるようになりました。

寛政元年(1789)飛騨屋の苛酷な使役虐待にクナシリ・メナシのアイヌが蜂起して、支配人・番人・船乗りなど71人を殺害しましたが、松前藩により鎮圧され蜂起の指導者37人が処刑されました。

寛政4年(1792)には、ロシア使節ラクスマンが日本との通商を求めて、バラサン・ニシベツ(別海町)に来航・上陸、その後根室へ向かい越冬するなど、こうした状況に幕府は、蝦夷地に強い危機感を抱くようになります。

寛政11年(1799)幕府は蝦夷地を直轄し、陸路・海路の整備を行います。根室・国後・択捉に会所を開き、野付半島先端部には、国後島へ渡るための要所として野付通行屋を設置しました。

寛政12年(1800)、伊能忠敬がニシベツ(別海町本別海)にて蝦夷地最東端の測量を行いました。また、西別川の鮭を将軍に献上したのもこの年からでした。

文政4年(1821)～安政元年(1854)は、蝦夷地に復領した松前藩の支配する時代となります。根室・国後・択捉に勤番所を置き、藩士を配置し警備にあたっていました。従来からの商人の場所請負は、続けられ漁業生産の拡大により、アイヌに対する使役の苛酷さは、その度を強めて行きました。

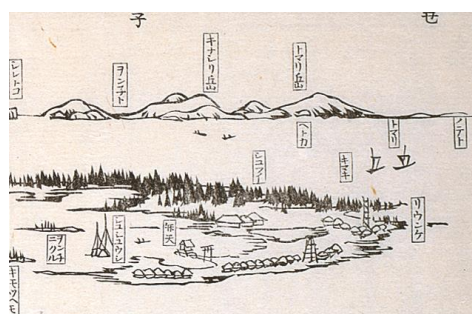
安政2年(1855)～慶応3年(1867)は、アメリカ・ロシアへの開国、国境の確定など、松前藩の蝦夷地支配に危機を感じ、再び幕府が蝦夷地を直轄するようになります。国防強化のため東北諸藩に警備や開拓を命じ、この地方は仙台藩の持ち場となりました。安政5年(1858)には、会津藩・庄内藩が加わると、ニシベツ(別海町本別海)を境に北側を会津藩、南側は仙台藩の持ち場となりました。

鮭鱒鯨漁を主体とする漁場は、各地に設けられましたが、近世の時代に別海町にあった集落は、現別海町本別海のニシベツ(西別川河口南側)・ベツカイ(西別川河口北側)です。安政3年(1856)の記録によると、ニシベツには、献上鮭の製造蔵、番屋、蔵などが13棟、ベツカイには、通行屋・献上鮭の製造蔵、番屋、蔵などが10棟、アイヌの住居が15棟あり、アイヌ81人(男38人・女43人)が暮らしていました。

また、寛政11年(1799)に設置された野付通行屋には、和人の支配人とその妻、アイヌの人足が8人が詰めて仕事をしていました。なかでも安政年間(1854～1859)頃の支配人加賀伝蔵は、アイヌ語通辞(通訳)として沢山の古文書資料を残し、別海町で始めて農耕をした人物として知られています。この地方のアイヌの良き理解者として、北海道の名付け親である松浦武四郎とも交友関係がありました。



ニシベツ秋味漁之図



東蝦夷日誌(ノツケ之図)



加賀伝蔵

●近代(明治以降～)

明治2年(1869)新政府は、開拓使を設置し蝦夷地を北海道と改称しました。北海道は、11国86郡に分けられ別海町は根室国野付郡と根室郡の一部となりました。明治11年(1878)開拓使は、本別海に缶詰工場を設置、缶詰を輸出し外貨を得、漁村に住民を定住させることを目的としました。明治12年(1879)別海外四カ村戸長役場が設置され、現在の本別海に役場が置かれました。

明治30年(1897)には、北海道国有未開地処分法により土地の無償貸与・無償付与による大地籍(開墾150万坪・牧畜250万坪)の売り下げにより、別海村内陸部への入植が開始されることになりました。明治39年(1906)には、厚別村が編入し、別海外五カ村戸長役場となりました。大正12年(1923)には、別海外五カ村戸長役場が廃止され、別海村が誕生しました。

昭和2年(1927)北海道第2期拓殖計画は、移民政策を間接保護から直接保護へ転換、許可移民制度で、1戸あたり350円の移住補助金を支給し、移住世話所と駅通所を設置しました。こうして、内陸部に入植者が移住していく過程で、昭和8年(1933)国鉄標津線(厚床—奥行臼—西別)が開通しました。さらに別海村役場も本別海から西別へ移転となりました。許可移民制度による移民数は北海道全体では少なかったのですが、別海村では、この時人口が1万2千人となり、昭和元年(1926)の4倍になりました。

しかし、昭和4～7年(1929～1932)に起こった冷害による凶作により農村は大打撃を受けました。別海村各地で農民大会が開かれ、北海道庁に状況を報告、その後、佐上北海道庁長官の視察があり、昭和8年(1933)に主畜農業五カ年計画を策定、畑作農業から主畜農業への大転換を行いました。

昭和30年代(1955～)機械開墾による根釧パイロットファーム事業、さらに昭和40年代後半から50年代にかけての新酪農村建設事業を得て、別海町は、日本一の酪農王国となりました。



官設別海缶詰工場



奥行臼駅通所



昭和初期のおがみ小屋(入植者の住宅が間に合わない時に作られた。)



根釧パイロットファームの住宅と牛舎



新酪農村建設事業によって建設されたサイロ・牛舎など